

武道の特性に関する覚書

—「気」の観点から—

大保木輝雄*

はじめに

本稿は、中学校のカリキュラムに武道教育が導入されることを見据え、その教材化を図るに際して不可欠な日本文化としての武道の固有性理解のためのキーワードとして、「気」の概念に注目するものである。

武道は「気」の身体技法の体系だといってよい。その内容を江戸時代に整備体系化された剣術（柳生新陰流や一刀流）に求め、そこに示されている「心と体を一体として捉えた」日本固有の運動学習の基礎構造を支えている思想を再度振り返り、それが今を生きる我々どどのように関わってくるのかを確認しておきたい。

以下、概略を述べたい。

1. これまでの研究の経緯

これまでの武道の学術研究は、1967年（昭和42年）、日本武道学会の設立により本格的に開始されたものであり、時を同じくして新設された東京教育大学体育学部武道学科の研究者及び実践者の養成が図られることで涵養されてきたものである。そこでなされていた武道論講座の内容は、武道の歴史と思想の研究および、渡邊一郎による武道伝書類の収集、翻刻、解読など研究基礎資料の充実と、中林信二による武道原

理を中核とした武道文化の研究等であった（注1）。それ以降、人文社会系の研究に加え、身体運動学を中心とした自然科学系の研究成果も多く発表されるようになり、武道研究の充実が図られて現在に至っている。

一方、心身論の東洋的アプローチとしてとしても、1970年代に人間疎外の問題を背景とした野口三千三による『原初生命体としての人間』によって、「からだ」から「こころ」の問題を読み解く試みがなされ、思想界にも大きな波紋を投げかけた。さらに、心理学者土居健郎の『甘えの構造』や精神病理学者木村敏の『人と人との間』が出版され、日本の心身論の中核概念である「気」の問題が大きく取り上げられブームとなった（注2）。また、湯浅泰雄の『身体－東洋的身心論の試み』や、市川浩の『精神としての身体』が発表され、哲学思想系のみならず様々な分野で身体性の問題が論議されるようになった。

そもそも「心と体を一体として捉える」東洋的身心一元論は、デカルト以来の心身二元論を超えた人間論の構築の延長線上で再認識されるようになったものであり、湯浅泰雄が武道における気の問題について「哲学や経験科学の最も基本的な問題領域にまで関わる内容を含んでいる」（『気・修行・身体』注3）と指摘しているように、近代スポーツとしての剣道や柔道といった武道ではなく、江戸時代に体系化された流派武術（古武道）への関心とともに浮上してき

* 埼玉大学教育学部保健体育講座

たものである。湯浅は、1984年にフランス国営文化放送と筑波大学の共催で行われた「科学技術と精神世界」というシンポジウムを主催し、「気」をテーマとしたことで欧米に「気」の概念が広く知られるところとなった。その後、日中間の気功交流が始まるなど、80年代のニューサイエンスブームも手伝って「気」という言葉が脚光を浴びることになった。同じ頃、源了圓は『型』と『型と日本文化』を著し、能と武芸の伝書の記述を研究対象として、身体的行為が目指す究極の型「心技体の一致」を解明し、日本人の自己認識の基本構造を明らかにした（注4）。

武道の抱えている問題はもはや武道専門家の占有物ではなく、国の内外を問わず他の領域からも研究の対象として熱い視線が注がれ、様々な成果が蓄積されるようになったのである。

そのような時代状況のなかで、筆者は、1976年から現在までの30年間、「機・気」という用語に着目した武芸伝書の解説、古流武芸の調査、現代剣道と古流の実践などを通じて、武芸身体論の解明を試みてきた。その間、上記の研究者から多くの示唆を得ることが出来、近世武芸の実像を浮かび上がらせつつある。特に木村敏の「『気』の特性は『間（あいだ）性』である」、との見解、及び源了圓の「日本の心身論は『逆対応性』がその特徴である」、との指摘は、筆者にとって近世武芸論の理解に大いなる示唆を得たものとなった（注5）。

一方、徳川家の流儀であった柳生新陰流と一刀流は現在もその道統が継承され「型」が伝承され、その伝承者との実技を通じての対話は、古流の「型」と現代剣道の形とは趣の違う内容であることがよく実感されるものであった。すなわち、柳生新陰流と一刀流の流儀に共通することは、たとえば刀を振り上げて真直ぐ振り落とすといった動き（「一刀」）に見られるように、誰にでも出来る実に単純な「たった一つの運動」で相手の総ての動きに対応することにある。しかし実戦の場面で、対峙している相手に対し

て、そのシンプルな「一刀」を「いつ、どこで、どのように」行使するかは、約束された動きであっても極めて難しい。相手を良く観察し、相手が先に仕掛けてくるように仕向け、「その時」瞬時に対応して「勝ちを取る」ことは、総て「こころ」の領域に属することである。まさに古流の型稽古は、「からだ」の動きと「こころ」の状態（「無心」）を「一刀」の出来映えを通じて学ばせることが実感できたのである。

以上のことから、筆者は身体技法の教材化を図る基礎研究において、「気」の身体技法のモデルを江戸時代に整備体系化された剣術（柳生新陰流や一刀流）に求め、現在に至るまで先達によって考察されてきた「心と体を一体として捉えた」日本固有の運動学習の基礎構造を明らかにすることで、初心者にも解り易い実践モデルを提示することが可能と思うものである。

2 考察の対象～各時代における「気」論の足跡

①端緒としての柳生新陰流＝柳生宗矩の思想

戦闘が収まった江戸時代の初期、武術家たちは戦場で会得した心と体の構えを、極限状態における一対一の対時空間にみだたてた剣術の世界に凝縮させた。戦闘という「命懸け」の世界に身をおいた者だからこそ見出せた一筋の光明である「いのち」の根源への気付きを、殺生の術から「人を活かす術」として整理・再編し、身法、技法、心法の三位一体となった働きを体得させるための体系を作り上げたのである。

その代表的なものが柳生新陰流で、この流派の修行の目的は「機（気）をみる心」の養成にあった。自分の置かれた状況をしっかり見据え、退くことなくいかにその場を切り抜けていくか。その究極の手段を「身を捨てて勝つ」ことに見出し、実にシンプルな極意太刀（十文字勝ち）と、勝負の場における「気」の在り方を示しましたのである。

以来、一触即発の場での心身統御法の中心課

題として「気」を捉えた武士の精神性は、武芸として受け継がれ洗練されながら、剣道においては「気剣体一致」の精神として現代の私達に伝えられている。

柳生宗矩（1571～1646）の『兵法家伝書』は、万物（人間）の本性と、その現象として現れる作用の関係論的認識に立脚し、実際に命のやりとりをした戦闘の時代を反映してか、仏教的な「機」（きざし、はたらき）を援用して「機をみる心」「機前のはたらき」をテーマとした心法論を展開している（注6）。

『兵法家伝書』に代表される江戸時代前期の伝書に共通するのは、それが流祖から弟子に受け継がれるべきものとして書かれ、勝負の場で獲得した個の「わざ」を集団技さらに政治論として発展させることに主眼が置かれていた。しかしながら、眼目は、剣術によって、行動の疎外要因となる「心の病」・「妄心」を排除し「無心」となって「機をみる心」を養成する「心法」の重視にあり、それを表現する「気」の使われ方は、体感（イメージ）を伝達するためのイメージ概念の域を出ていない。

②熊澤蕃山、佚齋樗山、窪田清音の気論

「気」に対する具体的な考え方を提示することで、秘伝・口伝で伝えられた「武芸の本質」を解き明かし、分かりやすく人々に伝えたのが、江戸時代中期に登場した熊澤蕃山や佚齋樗山である。

武芸のみならず、笛、琵琶、琴などの達人でもあった熊澤蕃山（1619～1691）は、技芸を追求する過程で、技芸の向上が心の変容をももたらし、それこそが「大道」への入り口となることを熟知していた。『芸術大意』（注7）の巻頭部分に「幼年の時より六芸に遊ぶときは、志主する所ありて自（おのづか）ら鄙俗（ひぞく）の辭氣（じき）に遠ざかる。玩物嬉戯（がんぶつきぎ）の此（この）心淫（いん）する事なく、放僻邪侈（ほうへきじゃし）の此身を危（あやう）くする事なし。外には筋骨の束を固くして

国家の用をなす。少しく君恩忘れざる所あるか達して心術を証する時は大道の助となる」とあるように、かつて中国の科擧の必修科目であった六芸（礼・楽・射・御・書・数）を修めることの重要性を剣術に対応させ、泰平の世における武術の個人的意義や社会的意義を整理し、それを「道」の概念を導入して普遍化させた。今日の「武道」概念の萌芽をここに見ることができる。

そうした蕃山の思想に影響を受け、その後、太平の世にあって剣術における心身技法のあり方に関する思想を深めていったのが、佚齋樗山（1659～1741）である。

剣術が低迷していたこの時期、樗山は「気」を形而上学的な哲学概念としてとらえ、剣術の目的を「練気養心」として生命の源である「気」の働きの着目し、剣術の稽古を媒介として「生死」の問題を解決せよ、と啓発した。

戦争を知らない世代が、平和な時代における武術をどう位置付けたらよいか。樗山は、時代こそ違え、現代の我々と同じような時代の趨勢にあって武術の問題を本来の姿へと導き、以降の武術家に多大な影響を与えた『猫の妙術』（「田舎莊子」に収録）、また、享保14年（1729）に発刊されたのが近世武芸気論の決定版『天狗芸術論』は寛政期に『武用芸術論』として改訂され、百年以上も読み続けられた。それは、「心」の在り方を指し、日常万端世間の事と剣術の事は別物ではない、と説き、剣術の技を使う時に心の「邪正真偽」を吟味し、それを「日常応接の間」に試し、「正が邪に勝ち真が偽に勝つことを自得せよ」と強く迫るものであった。つまり、非日常的な剣術の世界と日常の生活世界とはその根源において地続きであり相互補完関係にある、との核心をつき、「勝負」とは、質が転化し別物になることであり、剣術という「勝負」の場を通じて、「生死のことはすべて気の変化のみ」といった「人の気」を質的に変容させることだ、と流祖の体験知を理論化し、当時の人々に理解し易く説いたのである（注8）。

さらに時代が進むと、幕末に活躍した窪田清音（くぼたすがね）（1791～1866）が「形（かた）」と竹刀打込試合を融合させた剣術論を展開し、その実践を反映した多くの著作を遺している。旗本であり講武所頭取兼兵学師範役ともなった清音の「気」論は、近世初期・中期の武芸伝書にみられる「気」の用例がいわば概念としてのニュアンスが強いことに比して、身体の内部感覚や意識に即した実体として扱われているところに特徴がある（注9）。

清音の著作である『剣法初学記』『見聞集』『剣法梯（きざはし）伝授』などには、「心気理の研究は初学に益なし業を習ふの数多きに如かず、其業未だ熟せずして理気の工夫を専らすれば迷ひを生じて熟達し難し」、「業を励むは鏡を磨くが如く、鏡は心なり、業に随ひて心明らかなり」とあり、さらに「人必ず自ら足らざる所を知る。自ら足らざる所を知れば、業も気も心も共に進みて益々上達すべきなり」という記述が見られる（注10）。つまり、剣術のみならず柔術も修め、武術全般に精通していた清音は、「気」と「業」＝技の関係性を洞察し、「かた」や「試合」の実践を通して、何よりもまず技の修練に努めよ、と述べているのである。

剣の道を学ぼうとする人の為の道しるべとして書かれた『つるぎの枝折（しおり）』で、清音は心と気の関係に関し、簡潔明瞭に述べている。「心は躰（たい）、気は用（ゆう）＝はたらき也。心より気へ継ぎて用をなす。躰は内にして用は外なり。心気正しからざれば、外用を全（まっとう）せず。心を明にして其情術にあらはるるにあらざれば剣法ととのわず」「業は気の働きを本とする。気より眼目へうつり、躰にも手足にもわたり、相共にひとしく働かざれば、其わざ全くととのはず。其わざととのひたるを名付けて術といふ。気、目、躰、手、足、五つともに遅速なく、其程をはづれざるときは、自在のはたらきなるべし。かくのごとくなれば、此の術全く己がものとなる也。己がものとならざれば、まことの勝は得がたし、又其気目躰手

足の五つのもと心也」（注11）。内にある心のはたらきや動きは「情」として具現化され、それが身体の表情として外に現出し、相手への影響力として伝わる。清音は、自己の内－外の「あいだ」を往来する実体を「気」と見なしているのである。

清音はまた、姿勢と「気」の問題との関連にも言及し、「かた」や「しあい」の実践を、「あしのふみかた広からずせまからず、心気納まり、臍下にみちて腹を出し、腰のつがい正しく胸をはり、肩落、頭のすはり正しく、いずれの所といへどもたらざる所なし」といった理想的な身体と心の「備え」を獲得して「気の充実」が達成できれば、自分の力を自由自在に発揮できると述べている。

以上のような清音の「気」論から、近世初期に気の心法論として提起された武芸心法論が、中期に論理化され、激動の時代となった後期に至って実践期を迎えたことが読み取れる。

③近代剣道と気

江戸末期に活躍した剣豪として名高い千葉周作（1793－1855）からも、自身の剣術を練り上げてゆく過程に近代剣道の気についての消息を見てとることができる。

弟子が伝えている周作のことば（『剣法秘訣』）に「剣法ニ四戒アリ。驚（オドロキ）・懼（オソレ）・疑（ウタガヒ）・惑（マドヒ）是ナリ。苟（もし）モ此ノ一アレバ、即チ敵ニ臨ミテ其機先（キアヒ）ヲ察シ全勝ヲ得ルコト能（あた）ハズ。実際ニ於テ、弱者（よわきもの）亦能（よ）ク剛者（つよきもの）ニ勝チ、遅術能（おそきじゅつよ）ク速業（はやきわざ）ヲ制スルモノハ何ゾ。是レ他ナシ、活発敢為（かっぱつかんい）ノ精神ニ富ミテ、常ニ此四戒ヲ脱シ、思慮深奥（オモンパカリフカク）・進退活機（ハタラキ）ノ視察（ミトホシ）ニ鋭クシテ、能ク敵ヲ機先ニ制スルコトヲ得レバナリ。故ニ苟（いやしく）モ剣撃其法ヲ修メテ、身體ヲ厄難（やくなん）ニ護（まも）リ、兵戦時ニ臨ン

テ勁敵（ツヨキテキ）ヲ鋒刃（ホコサキ）ニ挫（くじ）カント欲スル者ハ、平素其意ヲ腕力ノ一點ニノミ注グコトナク、勉メテ驚懼疑惑ノ念虜ヲ去リ、思慮深奥活発敢為（しりょしんのうかっぱつかんい）ノ精神ヲ養ハズンバアルベカラズ」と述べている（注12）。

周作は、剣術は腕っ節に頼るのではなく、「四戒（驚懼疑惑）」（つまり『兵法家伝書』でいう「心の病・妄心」）を払拭し「思慮深奥（オモンパカリフカク）・進退活機（ハタラキ）ノ視察（ミトホシ）ニ鋭クシテ、能ク敵ヲ機先ニ制スル」（『兵法家伝書』でいう「機をみる心」）精神を会得することが本意なのだと強調している。

周作は北辰一刀流の開祖として、剣術をめぐる激変期に防具使用の竹刀打込試合形式である「撃剣」の体系化を図った。防具と竹刀という「共通の道具」を使い、「小手・面・胴・突」といった打突部位を定めて他流試合をも可能ならしめたのである。同時に、打突は「心気力一致」したものでなければならないとした。それは、近代剣道の「一本」の基準を支えるコンセプトとなっていくのである。

ここでは、「一本」を支える思想が、剣道の近代化に伴う「競技性」と競技性を超えた剣道の本質を考えるたいへん重要なポイントになる、という指摘のみに留めておきたい。

④ 武道「気」論の現代的展開

昭和になると、武道以外にも主に人文系の研究者からの考察が見られるようになった。

その一例に田中秀雄の『武道の心理』（昭和17年発行）がある。特に心理学の立場から検討された「気の諸相」に関する考察は、多くの武道関係者に読まれた。そこに示された「張る気」「澄む気」「冴ゆる気」といった各相の在り様は、長年その道に精進した芸術家や武道家などに共通して見られるもので、現在、これらの表現を好んで使われる方もいる。田中は、この三つの分類は、大正元年（1912）に刊行された

幸田露伴の『努力論』に著された高邁な学識と卓見による、としている。近世気論は露伴によって身体性と芸術性の絡みの中で再構築され、さらに、田中によって、勝負の場での心理論として展開されたといえる（注13）。

田中は、千葉周作の提起した「心・気・力」について、「力とは技と同じ意味でありまして、主として武道の技術に関する分野を、心とはその心理的方面を抽象したものです。（中略）気とは、この心と技との基調をなし是等を発動促進する原動力をなすところの精神力、生命力を謂（い）ふのでありまして、これは特に試合に際し、大切な役割を演ずるもの」と書いている。更にこの「気」は、錬成の経過に伴って「漸次向上進歩する」ものであって、錬成前期では「張る気」の態を、錬成後期においては「澄む気」、さらに完成期に入ってから「冴ゆる気」の相をなすものだと考えている。

ここでは、「気は進化、あるいは深化を遂げる」という指摘が重要である（注14）。

また、美学者の中井正一（1900～1952）は1945年、『気質（かたぎ）』と題した論考を発表（注15）。日本語の「き」という言葉の持つ広い領域と種類における意味について「それが固定的のものでなくして、むしろ含蓄より発出に向うとの流動性をもっていること」とする共通項を見出し、「その傾動の位置、方向、運動に結びつくことによって、特殊の空間的性格をもってくる」と考察を進め、「心が何らか、中心、湖心、核心などのごとく、いわゆる求心的なるものをもつに対して、気は何ものか流動的発出的核心を意味するように思われる」と一応の結論を導き出した。さらに中井は『気（け、き）の日本語としての変遷』の中で、記紀万葉から近松、芭蕉に至る日本文学に見られる「き」の用例を俯瞰（ふかん）し、とりわけ源平以後の軍記物語に、勝負の決定的瞬間に向かう凝集された時間ともいべき「機」の感覚が芽生えていることを指摘している。そこに「き」の大きな意味の転回を捉え、「一気貫通とでもいうべ

き『氣』の言語意味は、かかる生活の極限状況の下に、自らの意味を構成し（中略）生活そのものもまた、自らの道（ロゴス）を発見し、自ら結晶してゆくのである」と、「き」の用例変遷をたどる中で日本人の中に芽生えた「近代意識」の出現の徴候までも見出しているのである。特に芭蕉の発句の源を「機先（きさき）」に求めている。

この発句の契機となる「機先（きさき）」は、剣術の「未発の機」を打つ感覚と酷似するものではないか、と筆者は考えている。

さらに、先の田中秀雄の『武道の心理』にも序文を寄せている千葉胤成（1884～1972）は、1953年に発表した「『氣』について」という論考の中で、心理学の立場で、中国古典から西欧近代哲学、幸田露伴に至る「氣」の問題を取り上げ、考察している。

また、フランス哲学の澤瀉久敬（1904～1995）は、東京オリンピック開幕前夜（1964年）に行われた「からだの哲学」と題した記念講演で、人間の身体をめぐる発表を行い、「生物はたんなる物質ではなく、それになにか一つの動的な原理がある（中略）私はそれをかりに『氣』と呼んでおります」と述べ、「『氣』によって身体は内に統一性をもち、外に対しては能動的となると考えるのであります。この『氣』の内的統一性と外的能動性は正比例をなしており、身体に変化を与えるだけではなく、それ自身が進化発展する」と述べ、「氣」の本質を捉えている（注16）。

精神医学の木村敏（1931～）は、1972年『人と人との間』の中で、「氣は一応は自分のものとして言われていながら、自分の自由にならぬもの、周囲の情勢次第でいろいろに変化するもの、その意味で『人と人との間にあるもの』と位置付け、「氣」は「元来は超個人的、宇宙的な概念が全く自然に個人的な『心ノ趣クトコロ』として使用されているということが、この言葉に不思議な、外人には理解しにくい性質を与えているのだらうと思われる」と書いている

（注17）。木村の考察で重要なのは、「心」と「氣」の成立基盤が全く違うという指摘である。前者は「もっぱら自己の主観的な状態、目の前にある対象とは無関係に一定期間自己の内部で持続する意識状態」であるのに対し、後者の「氣」は、「つねに眼の前にある情勢や事物との関連が問題になる」ものだとしている。「氣」をそのように捉えた上で、「主観と客観、意識と対象の『間』にあるもの」で、その動きの主体は自己の側ではなく「氣それ自体の側にある」とする考え方は、武芸における気の問題を考える上で、今日、究めて重要な示唆を与えてくれる。

お互いに向き合って打ち合うという剣道の非常にシンプルな関係性の中で、体験的には把握していても言葉にしにくい「立ち合い」の場に流れるものは何なのか。これらの優れた先覚者の言葉を借りると、それがあたかも霧の晴れるが如く眼前に出現するような気がするとともに、これらの指摘が、日本固有の運動学習の基礎構造を明らかにして、初心者にも解り易い実践モデルを提示することに非常に有効であることを確信する。

一方、剣道（武道）を学ぶということの意義を考える時、外国人の視線は、私たちにある意味で「気付き」を与えてくれる。

特にドイツの哲学者であり、『肚 人間の重心』（麗澤大学出版会）の著者、カールフリート・デュルクハイム（1896～1988）の指摘は示唆に富んでいる（注18）。

デュルクハイムは、1937年頃からほぼ十年間、ちょうど第二次世界大戦を挟む年月を日本で過ごした。西洋の心身二元論的な人間の捉え方に限界を感じていた彼は、日本人の生活と心の持ち方に興味を持ち、日本語とともに弓道、書道、華道、茶道を学び、相撲にも通じたという。熱心に参禅をし、樗山の「猫の妙術」をも深く読み込んだという彼は、それら一連の日本の伝統文化に触れるうちに、そこに通底するものが「肚」であることを見出した。「『肚』とは、人

間がその根源的中心へと通じる力を見いだして、そこから自分が本物であることを確かめる心身状態」であるとし、「自我の成長と共に、自然の持つ根源力や秩序との結びつきは失われていくのが常である」から、身体の重心を「肚」に置くことによってのみ、人間は『頭による知力』の支配から解放され、身心一如となった活動の場に住することができる」と説いたのである。そして、本質になかった心身の状態を得ようとするれば「正しい姿勢、正しい呼吸、正しい緊張の修行」が拠り所となり、「全身全霊、その場に居合わせること、しかもその場にふさわしい役割を果たしつつ自己本来の存在を維持させるのが『肚』である」と喝破している。

デュルクハイムが『肚』を著した背景には、物質文明が栄え、知的レベルが高度になったにも関わらず、基盤となるべき精神はそれに付いて行けない、という当時のヨーロッパに蔓延していた危機感があった。彼はそれを打破する鍵を日本文化に求め、同書を著したのであるが、皮肉なことに私たちが置かれている現在の日本の状況は、当時のヨーロッパの状況そのものになっている。明治維新以来、西洋から多くを学ぶことで近代化を成し遂げ、戦後はグローバリゼーションの波の中で奇跡的な経済発展を続けてきた日本ではあるが、その過程で、私たちは『弓と禅』を著したオイゲン・ヘリゲルやデュルクハイムらが外からの視点で見出した「日本の文化に流れる本質」を忘れてきてはいないか。

ところで、1991年、「気」を核とした学際的な研究団体として「人体科学会」が発足した。きっかけは、冒頭で述べたように、1984年に筑波大学で開催された「科学技術と精神世界」というシンポジウムであった。このことにより爆発的な「気」ブームを生んだ。しかし、実はこのはるか以前から、日本には「気」をまじめにとらえ、考察を重ねていた研究者たちがいたことをしっかりと認識しておかなければならないのではないか。

3. 気の心身技法モデルの構築へ

近世剣術と現代剣道の接点を探る試みとして、ある実験をしたことがある。

まず、お互い道場の端に立って、一方の人はその位置に止まり、相手の人にゆっくり近付いてもらう。相手が自分の気持に変化を感じたら、止まる。これを剣道経験者・未経験者を問わず実施したところ、大多数の人が「九歩の間合」で止まった。さらにその距離から近づいてもらい、また気持に変化を感じた時点で止まってもらおうと、一歩踏みこんで手を伸ばせばお互いの身体に届く距離になった。さらに相手に近づいてもらおうと、その場から直接身体に手が届く距離で止まってしまった。この間隔をさらに縮めようとする、自分の身体はひとりで動こうとし、身体をその位置に留め姿勢を崩さないためには、非常な努力と意志を必要とすることが実感されたのである。

ここからは、自分と相手の距離の遠近は、自分の心と身体を繋ぐ感覚（気持）に変容をもたらし、自己の内的統一性に変化を余儀なくさせるという仮説が立てられよう。

そう考えると、「九歩の間合」（相手と自分が特別な関係をもったと意識する認知距離）、「一足一刀の間合」（意識と身体のもつ本能的機能が混在して働きます情動距離）、「攻防の間合」（本能的反射的に身体が動き出してしまう反射距離）という三つの転換点のあることが、よくわかる。

自分と相手との間（あいだ）には、相手自体の発する何かと自分自身のそれによって一種特別な気分が充満し、意味ある空間（場）が形成される。これが、「間（ま）」というものであり、「間」の遠近は、自分の内部で意識と本能との間の差異として内観され自覚されるものである。このように自分と相手の間に充満して流れ、自己の心身の間にも流れていると感じられる動的実体を、武芸家は「き」と名付けたのだと考えてよいのではないだろうか。

東京高等師範学校教授であった菅原融は『学校剣道原論』の中で、「剣道は、精神内容をふやす点には無力だが、精神鍛練においては他の学科に及ぶものがない」と述べ、「剣道の四病を除く姿勢（腰椎を折らず下腹に力が入る）を取り全身の力の中心に力が入る。この姿勢がくずれなければ四病をさくることが出来る。これが精神鍛練の基礎のものであることを先ず生徒にのみこませることが肝要である」と説いた。

このように、日本の土壌で生まれた「練気養心」の思想は、各時代の表現の差こそあれ、身体の問題として「腰・腹」中心文化を築き、デュルクハイムをして、「肚」の人間学的意味を「『肚』は、だれにも備わっている、より大きな生命の力と人間とを根源的に結合するという本性をそなえている」と言わしめた。

気の正体解明の唯一の手がかりは、まずは、心と体の座標軸を腰腹に治めることである。既に与えられているこの身体のカラクリ（存在の根拠）を剣道によって解いた先人の知恵を我々が如何に認識し継承するかは、一重に剣道（武道）に携わる者のみの問題ではないのではなからうか。近世初頭の武芸家の見た命がけの世界は、身体と精神を繋ぐ感性に関わる実体である「気」の問題として今日まで伝えられてきた。

心と体の間（あいだ）にあって、我々が当たり前のように実感している気の間をどう捉えたらよいのか。この問題を心身の問題として長きに亘って連綿として研究し続けてきたのが武道であった。これは武道の固有性を明らかにするキーワードとしてだけではなく、教育の柱となっている「生きる力」を考えるうえで様々なヒントを与えてくれるものでもある。

平成24年度から実施される中学校体育の武道教材として、伝統的な気の心身技法のモデルを具体的に提示することが緊急の課題となる。このことについては次回発表することとする。

参考文献

- 注1 渡邊一郎：幕末関東剣術英名録の研究，渡辺書店，1967。
- 中林信二：武道論考，中林信二先生遺作集刊行会，昭和63年。
- 注2 土居健郎：甘えの構造，弘文堂，昭和46年2月。木村敏：人と人との間，弘文堂，昭和47（1972）年3月。赤塚行雄：「気」の構造，講談社現代新書，昭和49年（1974）5月。などがベストセラーとなる。
- 大保木輝雄：日本的身体論に関する一考察—近世武芸論にみられる〈気〉の問題を中心として—，武道学研究9巻1号，45-52、日本武道学会，1976年7月。
- 大保木輝雄：武芸における〈気〉に関する諸問題—身体論的視座から—，武道学研究16巻3号，15-21，日本武道学会，1984年3月。
- 注3 湯浅泰雄：気・修行・身体，平河出版社，1986年11月。
- 注4 源了圓：型，創文社，1989年9月。
- 源了圓：型と日本文化，創文社，1992年6月。
- 注5 木村敏：人と人との間，弘文堂，昭和47年3月。源了圓：文武の芸における日本人の「心」，現代思想臨時増刊号—日本人の心の歴史—，青土社，1982年9月。
- 注6 柳生宗矩（渡辺一郎校注）：兵法家伝書，岩波文庫，1985年9月。
- 注7 熊澤蕃山：芸術大意。（山田次郎吉：剣道叢書，一橋剣友会，昭和11年，所載）
- 注8 佚齋栲山：天狗芸術論。（山田次郎吉：続剣道集義，一橋剣友会，大正12年，所載）
- 注9 大保木輝雄：武芸心法論についての一考察（その2）—『芸術大意』をめぐる—，埼玉大学紀要（体育学篇）第24巻，51-56，1991年10月。
- 大保木輝雄：武芸心法論についての一考察（その3）—近世後期の剣術伝書をめぐる—，埼玉大学紀要教育学部第46巻1号，85-89，1996年10月。
- 大保木輝雄：武道教育における心の問題—『天狗芸術論』を中心—，埼玉大学紀要教育学部第48巻1号，81-86，1998年10月。詳細は以上三つの論考で述べた。

注10 窪田清音：剣法初学記，見聞集，剣法梯伝授，
（山田次郎吉：剣道集義，一橋剣友会，大正12
年6月，所載）

注11 窪田清音：つるぎの枝折，（武道傳書集成・
第一集田宮流兵法居合，筑波大学武道文化研
究会，昭和63年3月所載）

注12 千葉周作：剣法秘訣，（千葉栄一郎編：千葉
周作遺稿，櫻華社出版社，昭和17年）。

ここでは，体育とスポーツ出版社，武道名著
復刻シリーズ14，2005年版を参照した。

注13 幸田露伴の『努力論』は，現在，岩波文庫
で復刻再版されている。

注14 田中秀雄：武道の心理，東苑書房，昭和17年。

本書は昭和37年に『勝負の世界』（誠信書房）
と題名を変えて再版された。

注15 中井正一：気質，増補美学的空間，新泉社，
1982年4月。

注16 澤瀉久敬：からだの哲学，医学と生命，東京
大学出版会，1967，9月。

注17 木村敏：人と人との間，弘文堂，昭和47年3
月。

注18 カールフリート・デュルクハイム：肚・人間
の重心，麗澤大学出版会，平成15年5月。

（2009年9月28日提出）

（2009年10月16日受理）